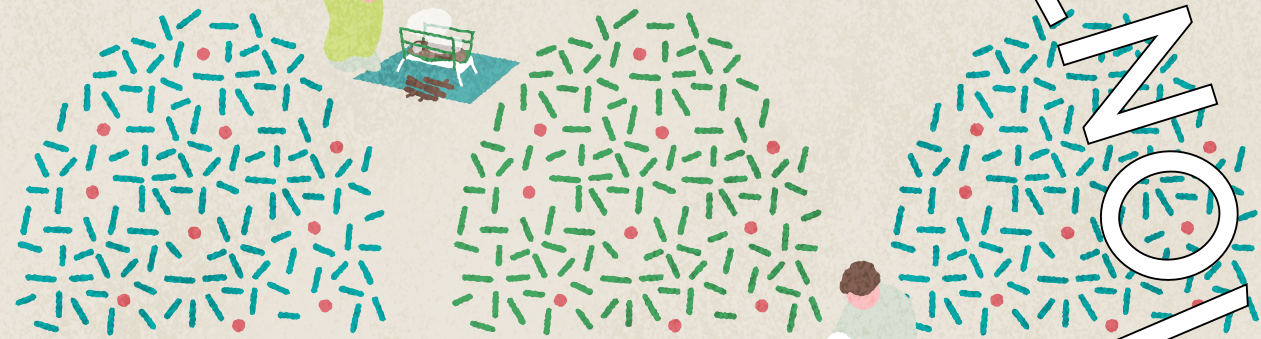


VISION

GONOH

RENOVATION



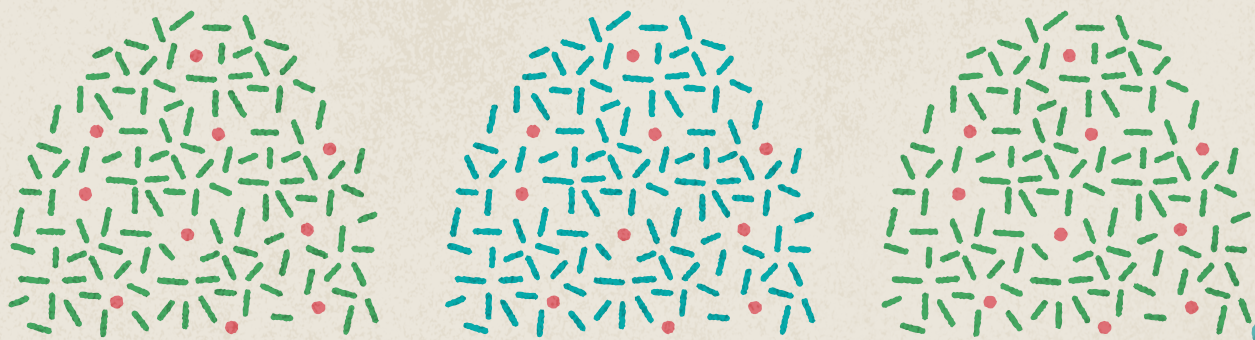
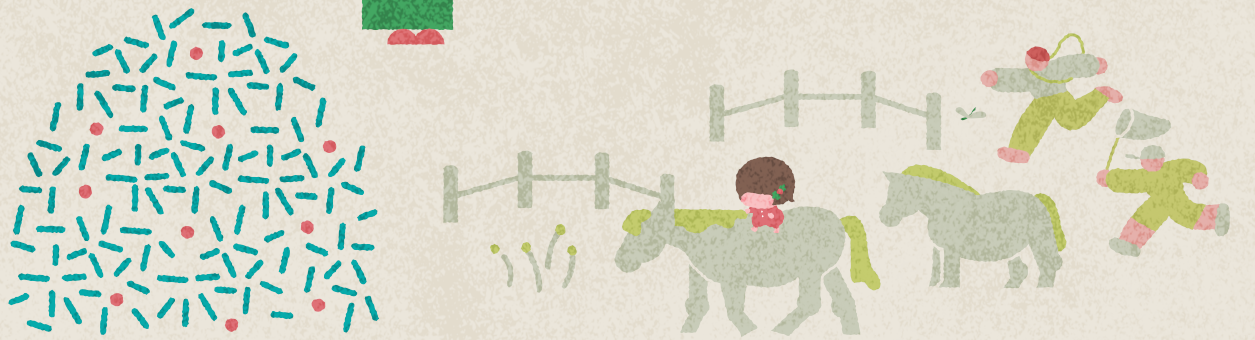
人・土地・時間が有機的につながる

五戸の暮らし

—五戸町リノベーションまちづくり構想—



MACHIDUKURI



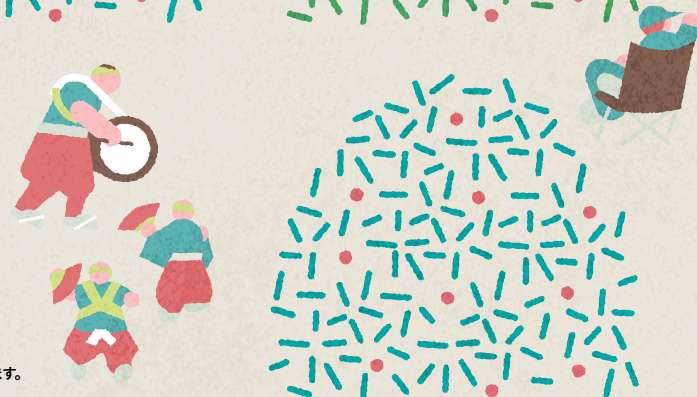
五戸町リノベーションまちづくり構想

2026年(令和8年)3月発行

著作・発行 五戸町(青森県)
編集 (株)リノベリング
協力 公民連携タスクフォース
デザイン Design & Creative アソビス

本誌内容に関するお問い合わせは下記にお願いいたします
五戸町都市計画課 TEL:0178-62-7962

※本広告物は、青森県による持続可能なまちづくり推進事業の支援を受けて制作しています。



人・土地・時間が有機的につながる 五戸の暮らし

—五戸町リノベーションまちづくり構想—



五戸町とは？

五戸町(このへまち)は、青森県南東部に位置する人口約1.5万人の町です。八戸市に隣接し、馬肉、牛肉、鶏肉や、リンゴ、長芋などの名産品が豊富です。坂の町として知られ、歴史ある街並みと自然が調和し、農業と工業のバランスが取れた地域です。

町の未来は、誰かが用意するものではなく、
関わる一人ひとりの挑戦から形づくられていきます。

本ビジョンブックは「五戸町らしさとは何か」を
改めて見つめ直し、次の一歩につなげるためのものです。
他地域の真似ではなく、五戸町の歴史や人、
土地に根ざした資源に光を当て、その価値を磨き上げることで、
ここにしかない魅力を生み出していく。

人と人がゆるやかにつながり、公と民が自然に交わることで、
新しい仕事や活動が生まれる。
そんな有機的な関係性を大切にしながら、
挑戦が歓迎されるまちを目指します。

このビジョンが、五戸町で挑戦したい人、
関わり続けたい人にとって、
「ここでやってみたい」
と思えるきっかけとなることを願っています。



はじめに

五戸町まちづくり構想の位置付け

五戸町では、最上位計画である「第3次五戸町総合振興計画」において、リノベーションまちづくりの推進を位置づけており、中心市街地の活性化や共創によるまちづくりの方向性を明示しています。

本構想は、「第3次五戸町総合振興計画」やそこに紐づく「立地適正化計画」に基づき、それらの将来像を具体的に動かしていくための実行戦略です。行政だけでなく、民間から選出された町民の声や、地域内で積み重ねられてきた取り組みを丁寧に整理・統合しながら、まちづくりの実践に結びつける道筋を描いています。

特に、民間の「やってみたい」という意思を尊重し、それをまちづくりに反映させることで、従来の枠組みにとらわれない、実効性の高い取組を進めていくことを目指しています。

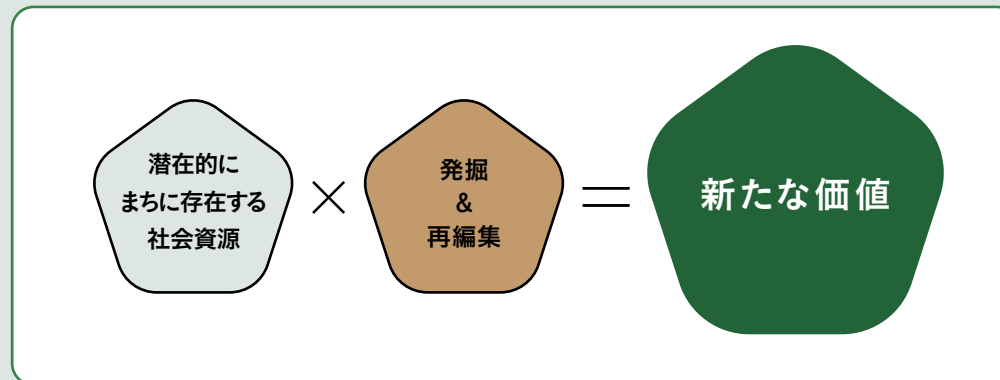
＼ 最上位計画 /



リノベーションまちづくりとは？

「まちの潜在資源を活用して、都市・地域の経営課題を解決する」まちづくりの手法の1つです。

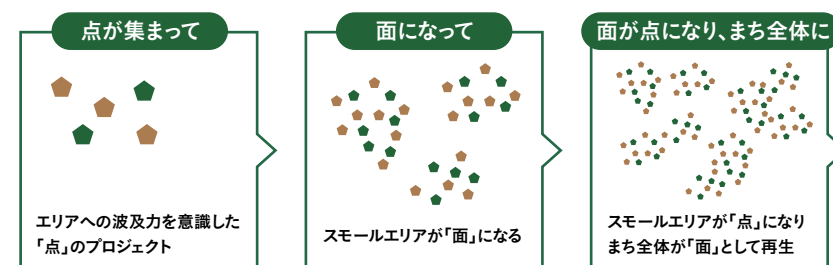
今まで価値を見出していなかったようなまちの資源を再発見・再解釈し、再編集していきます。新しいものをゼロからつくるのではなく、空き家など今あるまちの資源を上手く使いながら小さなチャレンジを同時多発的に生み出すことがまちに変化を生みます。こうした民間主導の取り組みを地道にしていくことでエリアの価値が上がり、エリアの再生につながります。



Point!

「点」と「面」で考えるリノベーションまちづくり

リノベーションまちづくりは「点」と「面」の考え方が大切です。一つの遊休ストックを活用した「点」のプロジェクトが生まれ、周囲のsmallエリア内で連鎖するように次のプロジェクトが生まれていくことで、**点が「面」になりエリアが活性化**していきます。さらにまち全体から見たとき、そのエリアが一つの点となり、他の地域においても新たな取り組みが波及しリノベーションまちづくりという考え方が繋がっていくことで、**まち全体が面的に再生**します。



※smallエリア…生活者が身体的に認識できる、およそ半径200～300mのエリア

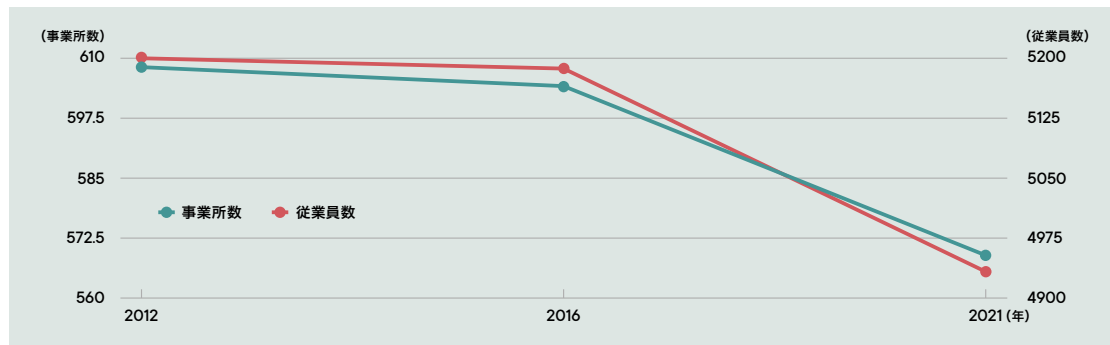
立地適正化計画で整理されている課題を再解釈！

五戸町の課題

五戸での「暮らしのイメージ」が持てる状況を作り出し
共感者（関係人口）を増やしていく



五戸町人口コーホート(年齢階級別純移動数)
【出典】総務省「国勢調査」、厚生労働省「都道府県別生命表」(RESASを参考に作成)



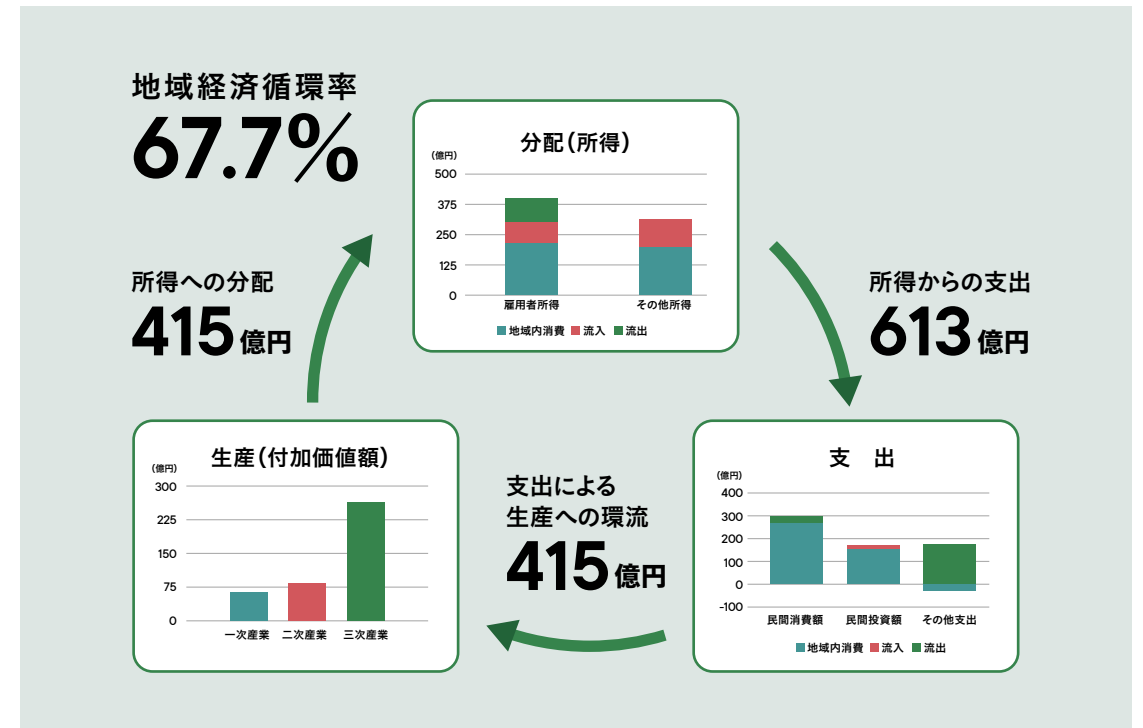
五戸町 事業所数・従業員数の推移

【出典】総務省「経済産業省「経済センサス活動調査」、「経済構造実態調査(産業横断調査)」

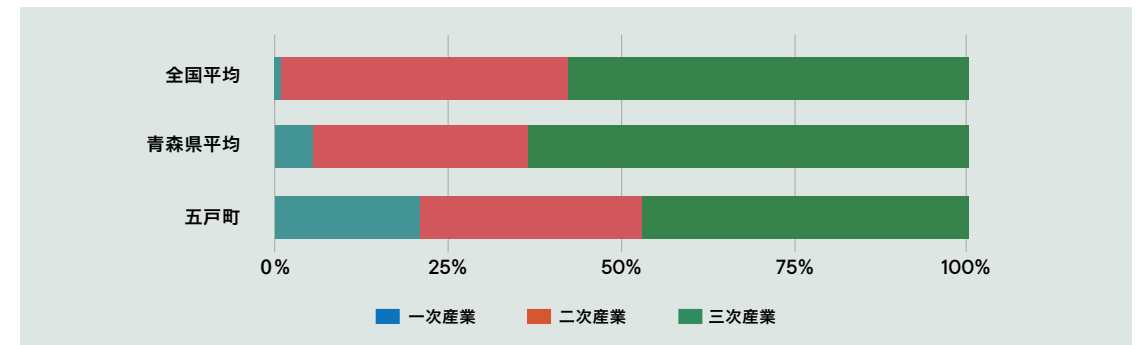
五戸町では、20代の若年層を中心に人口の流出が目立ち、進学や就職を機に町を離れた若者たちが、30代以降に戻ってくるケースも多くはありません。

その背景には、地域内の企業数および従業員数も減少するなどの状況の中で、地域を離れた若者たちにとって五戸で「豊かな暮らし」を実現できる具体的なイメージが持ちにくいという現状があると考えられます。

今あるなりわいを守り育てながら
五戸の暮らしがより豊かになる、新しいなりわいに進化させていく



地域経済循環率



地域内産業の構成割合(生産額総額)2022年

【出典】環境省「地域産業連携表」、「地域経済計算」(RESASを参考に作成)

五戸町の地域経済循環率は67.7%(2022年)と全国的に見ても低く、地域で得られたお金の約3分の1が域外に流出していることを示しており、地域の中でお金が回りにくい状況になっています。

しかしその一方で、農業分野では地域外への販売が多く、移輸出入の収支額は全国でも上位に入っています。2次産業では食料品の製造が活発に行われていることも鑑みると、農業は他分野とのつながりの中で地域経済を支える重要な役割を担っていることがわかります。

INTERVIEW

「守るため」よりも、「美味しさ」を伝えたい。
その方が、きっと未来へつながる。

五戸で創業70年を超える尾形馬肉店の店主・尾形さんは、地域に根づいた馬文化と向き合いながら、継承という重たいテーマに前向きな一歩を踏み出しています。戦後の軍馬の食肉転用を機に始まった馬肉店。味の原点は、曾祖母の料理の腕前にありました。

五戸は、南部地方でも特に馬肉を日常的に食べる文化が残っている土地。家庭ごとに“わが家の馬肉鍋”の味があり、地域の味として深く根を下ろしています。

しかし現在、飼料費の高騰や後継者不足、さらには牧場周辺環境への配慮など、馬を育てる環境そのものが危機に瀕しています。牧場の移転まで視野に入れざるを得ない状況で、さらにコスト増が重くのしかかっています。

それでも尾形さんは、「美味しい」と言ってもらえることが何よりの喜びだと語ります。その想いがあるからこそ、子どもたちや来訪者が馬とふれあえる場づくりや、ハレの日にぴったりな高品質な馬肉商品の開発、ふるさと納税などを通じて「五戸らしい食文化」を守り続けようとしています。

「守らなきゃ」ではなく「好きだから」「美味しいから」——そんな前向きな理由で、この土地の馬文化に触れてもらえたら。尾形さんの挑戦は、地域の味と記憶を未来へとつなぐ、大切な一歩です。

「守るため」よりも、「美味しさ」を伝えたい。
その方が、きっと未来へつながる。

「守るため」よりも、「美味しさ」を伝えたい。
その方が、きっと未来へつながる。



五戸町の見立て

Town Reimagined Through History

古くから馬と人の暮らしが深く結びついてきた

糠部郡にあたるこの一帯では、地形や気候条件を背景に、古代より馬の飼育が行われてきたとされ、平安時代以降には「南部馬」と呼ばれる馬の産地として知られるようになりました。

この自然条件は、丈夫で持久力のある馬を育てるのに適しており、馬の放牧・育成に好適。



馬で国を支えてきた！
五戸の誇り高き
シビックアライド



江戸時代には、南部藩によって領内各地に放牧地が整えられ、現在の五戸町もその一角を担いながら、馬の生産・育成が地域の重要な営みとして根づいていきました。

基幹産業を発展させた、
家族・地域・馬との
強い絆と連携



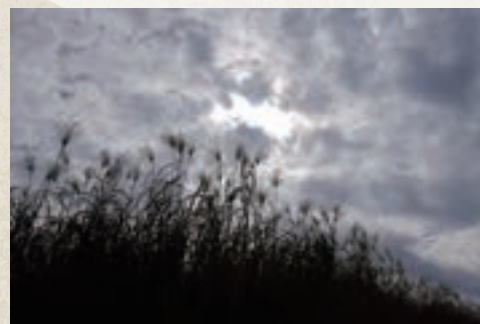
馬も地域の一員として
扱う地域文化

近代には広域から人が集まる“馬市”を開催

明治以降は、軍馬育成が国家的に制度化され、五戸を含む南部地域はその重要な拠点として発展します。
近代には広域から人や馬が集まる馬市が開かれ、地域経済や人の交流を支えてきました。

寒暖差が大きく 厳しい自然環境

寒暖差が大きく、冬季の寒さや風の厳しい自然環境があります。夏は高温になる日もある一方、冬は厳しい寒さにさらされ、農業においても冷害などの自然条件と向き合ってきました。



繰り返す冷夏・冷害 被害への柔軟な対応

五戸町の人々は、作物や品種、作業方法を工夫しながら、その時々環境に適応してきた歴史を持っています。



対応力を上げるための 多様な働き方

農業を基盤としながら、農閑期には養蚕、木工、馬産などの副業を組み合わせ、家族全員で生業を支える多様な働き方も育まれてきました。



受け継ぎながら進化させる 挑戦を続けるアツギたち

五戸町には、自然と向き合いながら、営みを受け継ぎ、必要に応じて形を変えてきた歴史があります。それは今も、暮らしや仕事、地域活動の中に息づいています。

自然の中で
培われた
高い感性！

様々な苦難を乗り越え
磨かれてきた高い対応力

馬と人の「五分五分」な関係を、これからも。



『ちょっと行ってみたい』と考えるような
場所やストーリーが、
これからの馬文化には必要だと思えます。

五戸町出身の岩井巽さんが立ち上げた馬革ブランド「五分 (GOBU)」。その原点には、子どもの頃に囲んだ馬肉鍋や、祖父母の家で命をいただく経験を通して体得した「生かし、生かされる」暮らしの記憶があります。

いま岩井さんは、青森で年間500~600頭が出る馬の皮を、丁寧に革へと再生する取り組みを進めています。牛や豚の革と違い、馬皮は流通も加工も難しく、長年ほとんど活用されてきませんでした。多くが廃棄される現実に、「命をいただいたあとの素材を、最後まで人の手に届けたい」との想いから、東北の工房と連携しながら、一枚一枚に価値を宿らせる挑戦が始まっています。

馬肉や馬革は、流通や価格では大手に敵わない側面もありますが、「その土地ならではの飼育環境や文化と結びついた価値」には代えがたい魅力があるといいます。岩井さんは、馬肉や馬革を単なる商品としてではなく、「癒し」や「ウェルビーイング」へとつながる体験に昇華できる可能性を見出しています。

「今いる“関係人口”をどう維持するかよりも、五戸ならではの強いコンテンツを提示することが大切。全国の人が『ちょっと行ってみたい』と考えるような場所やストーリーが、これからの馬文化には必要だと思えます。」

そんな想いから、馬肉を味わい、馬に触れ、馬革を手にとれる、心と身体が回復するような拠点づくりも構想中です。五戸が、馬と人が五分五分に生きる「癒しの町」として、未来に引き継がれていくことを願って。

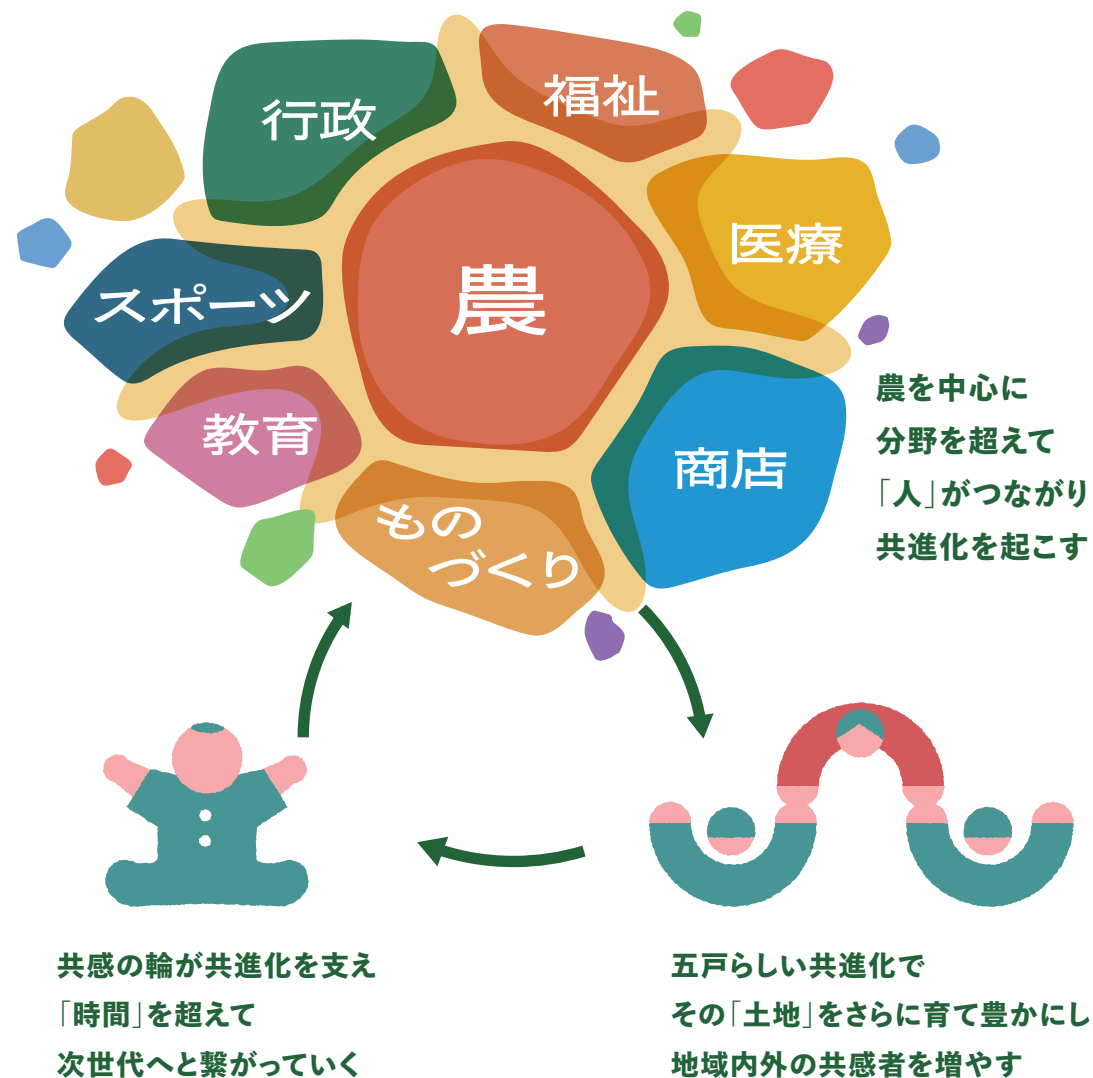
五分 (GOBU)
岩井 巽さん

五戸らしい「共進化 (co-evolution)」を育むために

実行戦略の方向性

五戸では、これまで多様な分野がつながり合いながら、暮らしのかたちを少しずつ進化させてきました。五戸の地域内外の人々や資源が響き合いながら育っていく、その日々の営みは、生物学において異なる種が互いに影響を与え合いながら、ともに変化し、進化していく「共進化 (co-evolution)」そのものです。

わたしたちは、農を核に各分野で五戸らしい「共進化 (co-evolution)」をさらに育み、互いに補い合い変化しながら調和していく「人・土地・時間が有機的につながる、五戸の暮らし」を、これからも丁寧に紡いでいきます。



民と官が手を取り合い

「民間主導の公民連携」で取り組む、 これからの五戸のまちづくり

人口減少や高齢化が進む中、限られた行政資源だけでは地域のすべての課題に応えるのが難しくなってきました。だからこそ今、地域に根ざした想いやノウハウを持つ民間と、公共性を担う行政が手を取り合い、五戸のまちをともに育てていく時です。

私たちは「やってみたい」という民間の想いを起点に、官民で対話し、実践を重ねることで、公共サービスの質の向上、地域経済の循環とはじめとするエリアの価値向上につなげ、五戸ならではの有機的なまちづくりを進めていきます。



小さな
挑戦を
仲間と
共に



株式会社ワークヴィジョンズ
西村 浩さん

五戸に何うようになってから、まちの暮らしを良くしたいという熱い思いを持っている人たちに、たくさんお会いしました。農業や畜産、医療、福祉や教育など、各々の得意分野で動き始めている小さな挑戦が、これからの五戸の大きな力になりそうです。大切なことは、その挑戦を地域と行政と一緒に支えていくことです。民間の動きに行政も寄り添い、ともに考え、ともに動く関係が生まれることで、まちの未来に新しい可能性が広がっていきます。はじめは小さな取り組みでも、それが少しずつつながり、やがてまち全体の価値を高めていきます。公と民が手を取り合い、仲間を増やししながら、五戸らしい豊かな暮らしを共に育てていきましょう。

すでに進んでいる!



分野を超えた それぞれの挑戦

Challenges Across Fields



五戸ではすでに、分野の枠を越えた挑戦が静かに始まっています。ここに紹介するのは、未来の構想図ではなく、いま進行中のリアルな挑戦です。

医療

挑戦中!



体全体の健康を守る 子どもが全力で走り回れる歯科医院

子どもが全力で走れる歯科医院を目指し、広々とした空間を整えています。歯の治療だけでなく、身体を動かし楽しく過ごす体験を通じて、医療へのポジティブな印象や予防意識を自然に育てます。

挑戦中!



技術を生かして 暮らしが楽しくなる商品開発

受け継がれてきた技術を生かし、今の五戸の暮らしを楽しむ新商品が開発され、五戸らしいものづくり文化が次世代へとつながっています。

ものづくり



挑戦中!



3代に渡り、地域に根ざし 建具屋として暮らしに寄り添う

お客さんに「おじいちゃんが作った建具だよ」と言われ、今は孫の自分が直す。世代を超えて暮らしを支える——そんな温かな関係が、五戸の豊かさです。



福祉

挑戦中!



さいごまで自分らしく社会と繋がれる 小規模多機能で寄り添う福祉

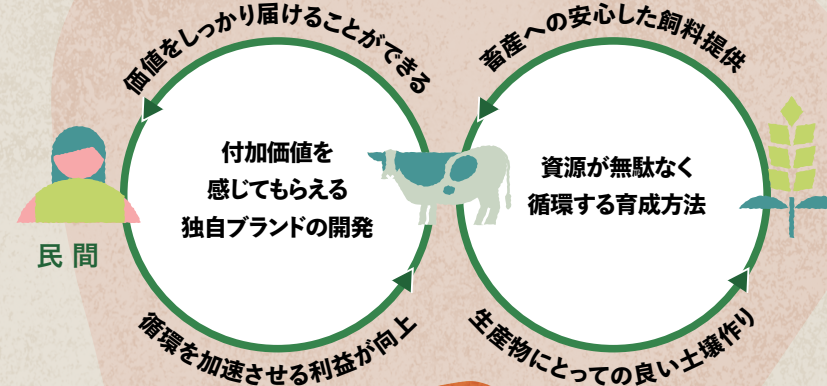
たとえ認知症があっても、誰もが「地域の一員」として関わり続けられるような、暮らしに溶け込んだ共生の仕組みづくりが大切です。すぐに社会は変わらなくても、次世代には当たり前となる未来を目指して挑戦を続けます。



挑戦中!



農における地域循環の向上を



農

挑戦中!



商店

住んでいる人が楽しいまちに 住民の同窓会みたいな場をまちなかに

行政任せではなく、自分たちの「やりたい」を自分たちらしい形で実現するには、民間の主体性が欠かせません。まずは、まちなかで暮らす私たちだからこそ提案できる、五戸の豊かな暮らし方を形にしていきたいのです。



具体的に検討中!



農業を核とした “共進化”

Co-evolution Around Agriculture

五戸町は「オーガニックビレッジ宣言」のもと、有機農業を暮らしの基盤として推進しています。一方で人手不足が課題となる中、農の魅力を再発信し、多様な関わりを輪を広げていきたいと考えています。

企画中!



定期的な映画上映会など 公共的な空間で 啓発イベントを開催したい

まちの中心である商店街は、地域の人と訪れる人が交わる場所。月に一度、映画や講演会などを開催し、五戸らしい魅力を伝えていきたいです。



企画中!



小学校給食に有機野菜を 供給中。五戸町産野菜の 使用率を上げていきたい

五戸町では、有機野菜を日常的に学校給食に取り入れる先進的な取り組みを行っていますが、使用率はまだ20%未満です。子どもたちの健康や食育のためにも、まずは25%を目指して引き上げていきたいと考えています。



民間だけではなく行政も学べる 分野横断的な勉強会を

民間が取り組もうとしていることの多くは、分野横断的な活動です。行政の皆さんとも一緒に、そうした横断的な発想を育てられる機会があるといいと感じています。

企画中!



企画中!



農作業を日常に 組み込むことで利用者や スタッフの心身が健康に

農作業を日常に取り入れることで、自然に触れる機会が増え、心身の健康や暮らしのリズムにつながります。ケアや福祉の現場でも、その穏やかな効果が大いに期待できます。



企画中!



五戸で作られている パンお菓子etcを 小学校給食に導入したい

五戸には、素材や製法にこだわるパンやお菓子の職人がいます。そうした地元の味を学校給食に取り入れ、原材料も五戸産へと少しずつ切り替えることで、子どもたちに食への関心と地元への愛着を育てていきたいと考えています。



企画中!



ポイント制度と連動して 健康意識を高める

五戸の有機暮らしにつながる活動・団体で各種ポイントを付与するなど、地域全体の健康意識の向上につなげられるといいと考えます。



企画中!



食と健康を絡めた フェスの開催

有機野菜の販売や健康講話に加え、口腔相談や体組成測定も行い、楽しみながら健康を見直すきっかけをつくります。



今後ぜひ進めたい!

分野を超えた 共進化! アイデアの種

Seeds of Ideas Across Fields

協力して
ほしい!



保育園、幼稚園、福祉施設や 医療施設の給食にも 有機野菜の供給を

すべての世代が安心・安全な食に触れる機会を増やし、町ぐるみで健康意識を育むことを目指します。今後は学校給食だけでなく、保育園や医療機関にも有機野菜の活用を広げていきたいと考えています。



これから
やりたい!



医療福祉の従事者自身も 住みたくなる、豊かな暮らしを

医療や福祉に関わる人が、自分の暮らしも大切にできるまちを五戸から実現したい。農や建築、教育分野で連携し、支える人にもやさしい医療福祉の形を模索していきます。



協力して
ほしい!



異業種の方々と連携して 農作物の納品を効率化

深刻な人材不足の中で、農作物の納品のための時間が大きな負担となっています。異業種の方々との連携の中で、地域としての付加価値を高められるとよいと考えています。

これから
やりたい!



富裕層や超健康志向にも 満足いただける 高付加価値の商品開発

富裕層や超健康志向の方に向けて、有機野菜と高級馬肉の鍋やデザートなど、五戸ならではの素材を活かした特別な商品を開発し、付加価値を高めます。



これから
やりたい!



大学や研究機関と連携した 有機野菜に関する健康の基礎調査

大学等のビッグデータと連携し、有機野菜の摂取と子どもの健康の関係を調査。有機野菜が健康に資するポイントを、基礎体温や欠席日数などのデータで実証していけるといいと思っています。



これから
やりたい!



遊休化した公共空間で 予防と健康をより身近に

公共空間を活用し、通いやすく親しみやすい健康拠点を整備できたらいいと考えます。日常の中で自然と健康に向き合える環境を整え、「予防」を暮らしに取り込むことで、健やかに歳を重ねられる地域をつくれます。



これから
やりたい!



「大工になるなら五戸に行け」 地域のブランド力を取り戻す

かつて全国に名を馳せた五戸の大工技術。その誇りと技を次世代につなぐため、地域の暮らしや文化とともに再びブランド力を高め、ていく取り組みが求められています。



INTERVIEW

地元のかっこよさは、生き方そのもの
競争するのではなく、互いに手を取り合うかっこよさ。



lauraのお店の様子



phoenixriseが開発したキャンプグッズ



中村畳工店の畳

laura

三浦 孝之さん

phoenixrise

赤坂 太樹さん

中村畳工店

中村 渉さん

五戸の町で、それぞれの仕事をしながらも、気の合う仲間としてつながり合っている3人がいる。

lauraの三浦さん、phoenixriseの赤坂さん、中村畳工店の中村さん。同じ学区で育ち昔から知っていたような間柄だが、本格的につながったのは、コロナ禍の頃。久々に再会し、話し、そして雑談から一緒に何かをはじめようになった。

それぞれが群れずに、自分の感覚で生きている。けれど、誰かが声をかければ集まり、ふらっと会いに行く。そんな自然な関係が、いまの3人を支えている。

「自分だけよければいいっていう人とは付き合いたくないんですよ」と語るのは三浦さん。彼は小さい頃に見た“かっこいい大人たち”に憧れて「しょうもない大人でいたい」と願う。手柄には興味がなく、都度適切な人をつなぎ、無理せずつながる関係性を大事にしている。



インタビュー時の様子

赤坂さんは、「型にはまるのが苦手」で、会社を継ぐのも最初は嫌だったという。けれど、自分の色を出して、好きなことをやると決めてから、仕事も暮らしも楽しくなった。「人と同じことをしたくない」「下積みが長かったけど、そのぶん自信がある」と、淡々と語るその姿からは、揺るぎない覚悟がにじむ。

中村さんは、小さい頃から野球一筋。プロ野球にも進んだが、その道を辞めたあと「働いて何だろう」と悩んだ日々が続き、自分の足元にある畳へと目を向けた。「今ももがいているけれど、生きている実感がある」と語る。

「東京じゃないと夢が叶わないって、悔しかった」と語る三浦さん。彼らが今、五戸にいるのは、五戸を特別な場所だと信じているからではない。ただ、自分が生きてきた場所、自分をつくってきた場所だから、何かを返したい、そんな想いがある。

「このまちじゃなきゃできなかった」。振り返ってそう思える日々が、きっと今も続いている。成功や競争ではなく、自分らしい選択とつながりで、日々をていねいに重ねていくこと。それが、彼らの静かで熱い“かっこよさ”なのだ。

INTERVIEW



その人らしく過ごせるよう、 寄り添い関わり合える場を創る。

医療では、歯科医療の分野で「健康の入口」と呼ばれる、お口の中を予防・治療で関わるだけではなく、行政や地域との多職種連携で地域の健康を守っています。

福祉では、小規模多機能型居宅介護施設を立ち上げ、介護が必要な状態であっても「最期まで自分らしく」を大切に生活できるよう、五戸町での暮らしの選択肢となっていきます。

私たちは、健康課題、高齢化が進む地域の中で、心と体の健康を守り、人と人との繋がり、そして、誰しもが訪れる「死」。最期を迎えるときにその人がその人らしく過ごせるよう、寄り添い関わり合える場を創っていきます。

この想いを大切に、医療と福祉の垣根を越えて挑戦し続けていきます。



医療福祉チーム

株式会社 Give Happiest 松尾 沙織
合同会社 AD-LIB 大前 大

大切なのは熱意、そして動くこと。

move 五戸を楽しむ

菓子工房 三福 三浦 司樹・亜美
有限会社 高賢燃料 高谷 賢輔・真紀

私たちmoveは、青森県五戸町在住の"地元"を盛り上げたい若手後継者のチームです。

moveのアイデンティティは"動かなければ動かない"精神。思い返すと、私たちが動き出したきっかけは行政と民間のあいだにあった壁。そこには町に対する"温度差"があるという思い込みからでした。

しかしある時、1人の役場職員が町のためにとでも熱く活動していることを知り、感化された私たちは五戸町に住み、暮らしている当事者として動かなければならない!と奮起しました。そして、五戸町に縁のあるお店を知り、交流を深める場作りを目的としたイベント"GONOHE PARKING BAL"を開催しました。

実際に動いてみると、経験も予算も実績もなかった私たちを助けてくれる人は本当にたくさんいて、町民をターゲットにしたイベントにも関わらず五戸町に関心をもった町外の人たちも多く来場してくださり、壁なんてなかったことがわかり



ました。

行政と民間、町内と町外。

私たちは勝手に線引きをしていたけれど、五戸町に関わる人たちのことを理解すればするほど、そんなことは関係ありませんでした。

大切なのは熱意、そして動くこと。

この活動を通して、周りの人たちの心が変化し動いていき、ゆくゆくは町全体を動かす流れになることが今のmoveの目標です。

わたしたちのmoveが町全体のmoveになるように、これからもわたしたちは動いていきます。



薪馬(まきば)
鳥谷部 信さん



薪馬のお店の前にある牧場



薪馬のパン



薪馬のお店の前にある牧場の様子

常識を疑い、信じることをやってみて、 初めて足りないことに気がつく

五戸町の静かな住宅地にあるパン屋「薪馬(まきば)」。店主の鳥谷部さんが焼くパンは、電気オーブンではなく薪窯で焼かれる。燃料も、火の回りも、焼ける量も自然の摂理に委ねるこの方法は、「非効率」かもしれない。けれど、「薪の温度が下がったら、もう今日はこれでいいかって思える。それがいい」と、彼は静かに笑う。

一度は東京でアパレルの仕事をしていた鳥谷部さん。年に一度、帰省するたびに「心が洗われる」ような感覚を覚え、やがて「五戸で子育てしたい」と考えるようになった。移住当初の不安や、金銭的な心配もあったが、「東京と違って、ここでは手を動かした分だけ、ちゃんと返ってくる。顔が見える関係がある」。地域の人からもらう野菜や声援は、かつての自分の両親が築いてきた信頼の上にあることを自覚しながら、鳥谷部さんはそのバトンを自らの手で次へとつなごうとしている。

「普通はこうあるべき」という考え方に、ずっと違和感があった。そう語る鳥谷部さんは、パンという手段を通じて、「誰かの役に立つこと」を暮らしの中心に置いている。週に一度だけ開く店でパンを焼く。売るだけでなく、相談の場としてスペースを開いたり、これから何かを始めたい人と一緒に考える時間もつくっていききたいという。

「屋号に“パン”を入れなかったのは、いつでも柔らかく形を変えられるようにするため。今の自分にとってしっかりきているのが、たまたまパンっただけ」

薪の火で焼くパンは、日々少しずつ味も形も変わる。「今日しか食べられないパンがある」ように、今しか出会えない自分がいる。その一瞬を大切にしながら、鳥谷部さんは五戸の暮らしを今日もゆっくりと焼き上げている。



パンを焼く鳥谷部さん

プロジェクトに参加していただいたみなさんに聞いてみました

これからのまちづくりは、民間の皆さまの挑戦と行動力が大きな力になります。五戸町は、そうした前向きな動きを歓迎し、民間主導の取り組みを全力で応援していきます。行政としても積極的に関わり、共に知恵を出し、汗をかきながら、公民連携による新しいまちづくりを力強く進めていきます。 若宮 佳一 町長



構想づくりに参加して五戸町をなんとかしたいという同志がたくさんいることを改めて感じました。「こうしてみたい、こうやってみればおもしろい」という意見に触れた事で自分の職務へのモチベーションが高まりました。 昆 久米彦

会議室で案を練るだけではなく、色々な人と直接顔を見て話すことに何より価値があると再認識できました。 鳥越 由姫子

まちづくりに医療福祉が溶け込んでいるのが嬉しい。ワクワクする選択肢を皆で作っていきましょう。 大前 大

自分の範疇を少し越えて、町のためにできることをしていく。 中村 知広

行政も民間も協力しあえるまちだと感じています。こどもにもおとしよりもやさしいまちづくりが進んで行くことを期待しています。 手倉森 悠

「町興し＝外から人を呼び込む」に偏りがちですが、まずは町民である自分たちが「こんなのがあったらいいな、面白そうだな、住みやすいな」と思える視点を大事にしたいです。 武山 香織

様々な垣根を越えて、大切な仲間が沢山できました。この繋がりを大切に、五戸町の未来を作っていきましょう！ 松尾 沙織

五戸を盛り上げようとしている方々がいることが知れて嬉しかったです。これからも宜しくお願いいたします。 尾形 嶺

私は、五戸町を「誇れるふるさと」にしたいと本気で考えています。子どもたちが育ちたい町に、若者が戻りたい町に、誰もが安心して暮らせる町にしたい。五戸の未来は、私たちの行動で変えられると思います！ 高根 姫良倫

ここで生まれた繋がりを大切にしつつ、これからも五戸町の暮らしについて考え続けていきたいです！ 三浦 亜美

これからも民間、行政を繋ぎながら五戸町の勝ち筋を探していきたいと思います！ 新堀 裕貴

五戸町上大町商店街を中心に商店街を盛り上げて本業に繋げていきたい。 高谷 賢輔

30代前後の事業者が、今までの習慣や関係にとられることなく、新しい挑戦をする光景は非常に頼もしい。 佐々木 政喜

五戸町を盛り上げたいと思っている人が、こんなにもたくさんいることを知れました。五戸町の魅力が多くの人に広まるように自分にできることから始めていきたいと思いました。 藤本 桃可

五戸に関わるたくさんの人との繋がりを手繰り寄せて地道に町での「暮らし」をより良いものにしていきたいです。 三浦 司樹

五戸町は様々な思いや技術を持ったたくさんの人達が暮らしている町。そんな町の一員として、皆さんの力になれる様なものづくりをしていきたい。 柳沢 雄基

一度離れてもつながり、いつか戻りたくなるまちへ。 鳥井 優樹

行政も事業者も町民もみんなで手を取り合ってもっともっと魅力溢れる五戸町を作っていきましょう！ 船場 真柊

良薬は口に美味し！食べて健康になる！！そんな作物をこれからも作り続けていきます。 春 義彦

民間の自由な発想力やあふれる行動力を、行政側はその火を絶やさないう、更に波及するように支援したいです！ 館山 恵理加

議論の中で挙がった「お互いの活動を知らない」というのが印象的だった。構想会でできた縁を大切に連携を深めていきたい。 川村 心叶

五戸町での暮らし方が、来た人いる人分け隔てなく活力があるものになるよう頑張りたいと思います。 諏訪内 健太

挑戦が応援を呼び、応援が次の挑戦を照らす。そんな温かな循環がめぐる五戸町を共に描きたいです。 鳥谷部 信

皆さんのパワーに圧倒されました。負けないように頑張ります！ 鳥谷部 彩羽

私はあまり参加できておりましたが、行政と民間事業者で隔たりなく意見を交わしていたのが印象的でした。活動を通して、こういった交流の楽しさやメリットを伝えられるような発信をしていきたいと思いました。 丸山 太一

五戸町で暮らす人が、五戸町を好きになれる町づくりが理想です。自分には何ができるのか考えていきたいです。 中野 翔太

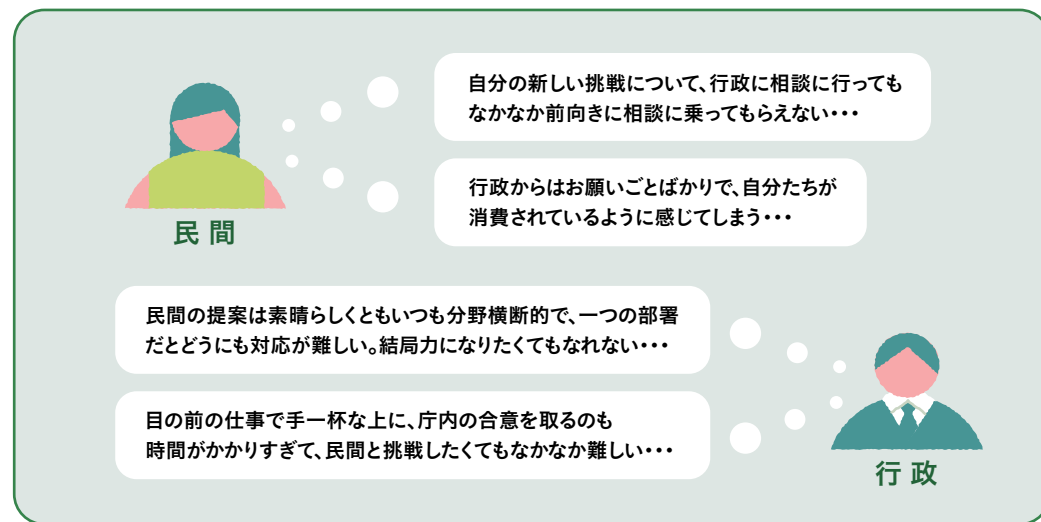
ひとりひとりが想いをもって行動に移すと、それぞれが繋がり、新しい価値観に触れるのではないかと思います。 豊川 真寿

五戸を想うすべての人を優しく包み込む。そんな空気感をもった、居心地のいい町を共に築いていきたい。 久慈 美穂

分野を超えた“共進化”を支える！ 行政組織としての進化

行政と民間が力を合わせてまちづくりを進めていく“**公民連携**”の重要性は、以前から広く言われています。しかし実際には、民間の力をうまく活かしながら、行政と対等な立場で協力し合う“**本当の意味での連携**”をつくるのは簡単ではありません。

全国各地で、**行政と民間が互いに無理なく支え合える、理想的な関係づくり**を目指して、いまでも多くの試行錯誤が続いています。

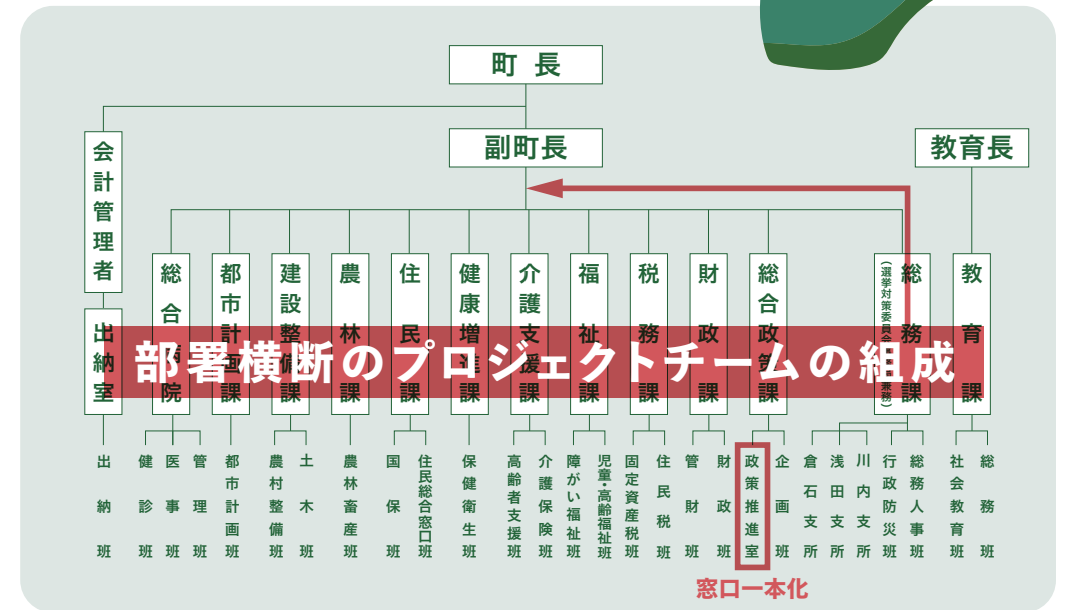


全国でよく起きている民間と行政のすれ違い(例)

これから起こっていく、前述のような**民間の分野横断的「共進化」**を、行政としてうまく活かせる体制が非常に重要だと考えています。



五戸町で部署横断のプロジェクトチームを組成する



分野横断的な民間提案への積極的な検討・伴走

五戸町ではまちのコンパクトさを最大限活かし、町長直結の分野横断的なプロジェクトチームを組成して、民間からの分野横断的な提案に積極的かつ前向きな議論・検討を行う体制づくりを目指します。

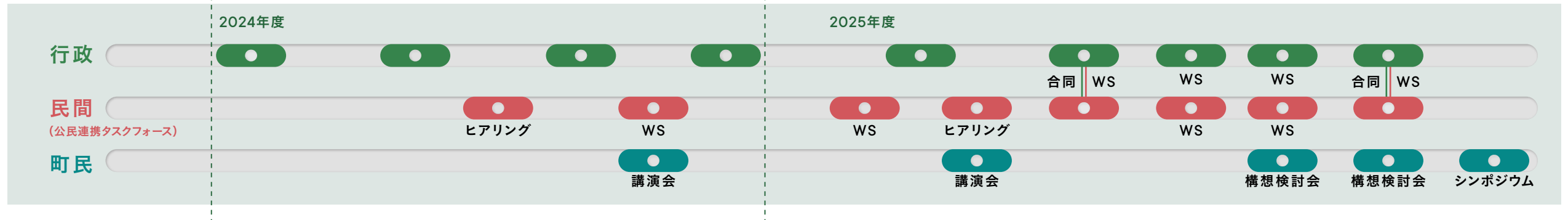
未来の都市経営を担う役所内の人材育成

若手の行政職員が主体的な民間との関係性を築くことにより、役所内の議論にとどまらない、視座の高く視野が広い、将来の都市経営を担う人材を庁内にも育成していきます。



これまでの構想検討会議

2024-25'ガントチャート



第1回 構想検討会

日時：2025年11月25日（火）19:00～21:00
 場所：松尾歯科 2Fキッズルーム
 講師：西村 浩さん（株式会社ワークビジョンズ代表）
 講演タイトル：「縮退の時代に生き残るための新しいまちづくり実践論」

会の冒頭では現時点での「五戸町まちづくり構想」の進捗が共有され、参加者が構想の全体像と現在地を確認した後、西村浩氏（株式会社ワークビジョンズ代表）による講演が行われました。制度や計画ではなく、個人の小さな動きが街を変えていくプロセスや、行政と民間の柔軟な関係性を描いた各地の事例が紹介され、会場からは感嘆と共感の声があがりました。

その後のディスカッションでは「今もある!五戸の『有機的暮らし』とは」をテーマに、町内にすでに息づく魅力や日常の工夫を言語化し、民間が主導するまちづくりの可能性について多様な立場から意見が交わされました。



第1回構想検討会での参加者同士のディスカッションの様様

第2回 構想検討会

日時：2026年1月15日（木）19:00～21:00
 場所：松尾歯科 2Fキッズルーム
 講師：柿原 優紀さん（tarakusa株式会社 代表取締役）
 講演タイトル：「土地の力を守りながら育てるためのものづくり」

冒頭の構想の進捗共有に続いて、編集者であり旅や土地に根ざした実践を続ける柿原優紀氏（tarakusa株式会社 代表取締役）をお招きし、講演いただきました。「観光」や「まちづくり」といった外部からのフレームに依らず、土地の力をそのまま活かしながら人が集い、ものづくりや日々の営みへと繋がっていく在り方——その姿勢や実例は、参加者の暮らしの風景と自然に重なり合っていました。

後半のディスカッションテーマは「私はこんなこと、してる!したい!できそう!」。それぞれが語った暮らしの実感、まさに「人・土地・時間が有機的につながる五戸の暮らし」そのものでした。日々の営みからにじみ出る五戸らしさを、皆で確かめ合うような対話の時間となりました。



第2回構想検討会での柿原優紀氏の講演の様様